

## 【書評】

喜田信代著 『天主堂建築のパイオニア・鉄川與助』

―長崎の異才なる大工棟梁の偉業―

菊森 淳文

### 1、概要

本書の特徴は、次の三点に集約される。

(1) 鉄川與助に関する詳細な資料の収集と整理

本書は、鉄川與助の「手帳」や「手紙」を含め、多くの資料を収集して整理した書物である。また、教会堂全体・柱・天井・煉瓦・ステンドグラス等デザインの専門家らしく、数多くの写真資料も掲載されている。筆者が「おわりに」で書いているように、「本書は、論文ではなく、かといって、エッセイとも言えません。」(三七五頁)ただ、本書が扱う多くの資料は、「論文として整理することが資料を活かすことになる」(三七四頁)という考えに基づいて収集されており、ここに本書独自の価値があるともいえる。

特に、第五章「天主堂の請負と工事費の清算」で、「鉄川與助は、『手帳』などに多様な記録を残し、工事毎に少しずつ書類を整えています。工事費は、材料費や職人賃等必要な費用を、教会側が別に払っていたことも判りました。」(三七四頁)と筆者も述べている。

(2) 鉄川與助の多彩な人物像の実像の描写

鉄川與助(一八七九〜一九七六)は、建築技術者として、「明治後期から大正・昭和にかけて多くの業績を残している。木造や煉瓦造はもとより、石造や鉄筋コンクリート造にも先駆的に取り組み、中でも他に類の少なかった天主堂建築は高く評価されている。」(一九頁)

次に、鉄川與助は実業家として、明治三九(一九〇六)年、土木建設業鉄川組を設立し、昭和一九(一九四四)年、鉄川組を第一土建会社に統合し、昭和二四(一九四九)年、鉄川工務店に名称を変更している。このような実業家としての経営手腕と工事請負方式の採用やリスク管理が、多くの天主堂建築等の工事を実行できた大きな要因となったと考えられる。

それも、ただの建築技術者や実業家ではなく、最新建築技術の研究に熱心で、明治四一(一九〇八)年、日本建築学会に、准員として入会している。しかも、「明治の末に、尋常高等小学校を出た大工が建築学会の准員に推挙されるほど、信頼を得ていたことが分る。」(三一頁)

同時に、鉄川與助は、大正二一(一九一三)〜一九二三(一九二四)年の約一〇年間、魚目村の村会議員をしており、この議員活動は、與助の本業にも良い影響を及ぼしたと考えられる。「道路、学校など公共工事の整備を進めることは、土木・建築業者としての請負にも繋がったと思われる。」(三九頁)

このように、鉄川與助は、建築技術者・実業家・研究者・議員の四つの顔を持っていたと言える。

(3) 鉄川與助が生きた時代背景と成し遂げた偉業の意味

鉄川與助は、明治一二(一八七九)年に生まれ、明治二七(一八九四)年に長崎県南松浦郡榎津尋常高等小学校を卒業後、大工となり、明治後期から昭和期にかけて、長崎県南松浦郡新魚目町丸尾郷に拠点を置いて、長崎県の五島列島を中心に、長崎県・福岡県・佐賀県・熊本県等に、教会建築・寺院・一般建築等を数多く建築している。そして、鉄川組設立、日本建築学会入会、魚目村村会議員、鉄川工務店に名称変更、建設大臣表彰・黄綬褒章受章(昭和

三四（一九五九）年）、横浜市にて逝去（昭和五一（一九七六）年）と九七歳の人生を歩んだ。

興助が生きた時代は、日本の長い鎖国が終わり、急速な近代化を目指して、西洋の文化と技術を導入した、その後の時代である。前時代には、安政五（一八五八）年、日本がアメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランスと修好通商条約を結び、長崎・横浜・函館等に居留地が設けられ、外国人のための住宅・旅館・商館・教会堂等が建築された。これらの居留地建築工事に従事した建築技術者・大工は、和洋折衷の建築様式を生み出し、それらの建築技術者・大工の中には、職人を配下に組み入れ、専門の技師を育成し、設計・施工の近代的建築請負組織である総合建設業として発展していった企業も多い。次に、日本人建築家の誕生は、明治一二（一八七九）年であり、工部大学校造家学科の第一回卒業生である辰野金吾、片山東熊、曾禰達蔵、佐立七次郎の四人が、日本人技術者として建築の設計・監督に当たった。鉄川興助は、まさにこの明治一二年に生まれている。従って、日本の近代建築の勃興期から成長期にかけて、活躍したことになる。

鉄川興助の偉業の意味は、このような時代背景の中で、彼が次の三点を実施したことである。

第一に、西洋建築と日本建築両方の技術を取り入れ、教会堂建築の分野で日本の先駆者となったことである。

第二に、建築学会に参加し、中央や西洋の新しい建築技術を常に研究したことである。筆者も、「近代的な建築書類や考え方を、他に先駆けて採り入れたことだと思います。」（三七四頁）と語っている。

第三に、建設業の経営者として、請負契約に伴うリスクをできる

だけ小さくし、請負事務の効率化を図ったことである。「明治時代に鉄川組が請負を始めた頃は、契約書の記載内容や書式などはまだ整備過程で、決まっていた訳ではなかった。」（三一八頁）工事請負契約には、直営方式、請負方式、実費精算方式が存在し、施工は、入札、特命、定式請負のいずれかで行われる。「興助は桐古天主堂改修工事で降、入札しないで継続的に天主堂や司祭館などの工事を請け負っている。」（三一九頁）「これは、何よりも、天主堂と興助との信頼関係に基づいている。」（三一九頁）また、契約書や心得書を公示し契約関係書類を整備することで、「組織を統率し、工程を掌握し、工事の円滑な推進を図っているものと考えられる。」（三二二頁）特に、「新築工事費予算書」により、材料費・手間賃、工事工程等を把握し、「材料納方請負証書式」・「工手間請負人心得書」等に複写式の書類を使用していたことから、「書類の標準化」が進められていたことがわかる。特筆すべきは、「建築材料運搬請負証書」で、例えば、「旧長崎大司教館の工事に信者の奉仕作業を呼びかけるのではなく、（中略）材料の運搬請負を契約している。」（三二八頁）

## 2、本書の構成・内容と特筆すべき記述

### 第一章 鉄川興助の生涯と業績

第一章では、鉄川興助の主な経歴、五島から長崎・九州本土への進出、そして横浜での晩年を整理して描いている。工事実績は、明治期・大正期・昭和期に分けて整理している。明治期には、「天主堂建築では、構造や柱の組み方、壁、床や天井の造り方や仕上げ、煉瓦やステンドグラスなどの新しい材料やその使い方など、作品ごとに工夫を凝らし、完成度を高めている。」（三五頁）また、地理的にも、「興助は出身地の上五島から、福江島と、平戸の小値賀島や

生月島と、五島列島を縦断して、さらに九州本土の佐賀や福岡まで工事の地域を拡大し」(三五頁) ている。大正期には、長崎県に二五件、宮崎県に一件、熊本県に二件と広げている。建築の構造は、「木造、煉瓦造、石造に取り組む一方で、長崎神学校雨天運動場は鉄筋コンクリート造で建築しており、新しい工法にも積極的に取り組んでいる。」(三七頁) この背景には、大正一二(一九二三)年の関東大震災で、煉瓦造が地震国には不向きと評価されたことがある。昭和期は、三五五件の工事実績があり、施工地域は、長崎県三三三件、佐賀県一件、福岡県一件、熊本県一〇件へ拡大し、発展している。用途別では、教会・教会関係工事六〇件、公共工事一〇件、一般建築工事二一四件であった。構造は、鉄筋コンクリート造二一六件、木造六一件、コンクリート造二九件、鉄骨造二四件、煉瓦造一件等となっている。この背景には、輿助の次男、輿八郎が昭和二四(一九四九)年に輿助から経営を引き継いだことがある。輿八郎は、二級建築士の資格を昭和二六(一九五一)年に取得した。

第一章で、特筆すべき記述として、妻トサの存在の大きさがある。鉄川組・鉄川工務店で、トサは、職人の食事や、工事現場での布団や、暮らしの面倒も見ていた。「輿助の口癖は、『俺の仕事の半分は(妻の)トサがした』だったという。」(四五頁) また、晩年は横浜に住んで、終焉の地となったが、上五島の出身であるだけに魚が好きで、「わざわざ茅ヶ崎まで魚を買いに行ったこともある。」(四五頁) という事実も、人間鉄川輿助を感じて興味深い。

第二章 建築技術者・棟梁 鉄川輿助の仕事―天主堂・学校・寺院  
第二章では、輿助の仕事を、新上五島町(鉄川輿助の出身地)、福江(カトリック布教の拠点)、平戸(キリスト教伝来の地)、佐賀

県・福岡県・熊本県(元長崎大司教区)、長崎(信徒発見の聖地)と、地理別に天主堂等を各論として説明している。各天主堂等の写真資料も多く、見どころなどを紹介し、旅行者にとってもガイドブックとなっている一面もある。本書が、論文でもエッセイでもないという所以である。そして、最後に、「天主堂の美々様々なデザイン」として、教会建築の共通事項である、塔のある天主堂、天井の形(リヴ・ヴォールトと折り上げ天井と格天井)、聖堂を飾る彫刻(柱や天井・祭壇と信徒席の衝立)、ステンドグラス(硝子障子と硝子絵と色板ガラス)、煉瓦の飾り積み、祭壇の六項目に分け、建築やデザインの特徴を総論的に説明している。

本書の面白さは、各天主堂を筆者が実際に訪問して、地理的な立地や建築の特徴を平面配置図等と一緒に説明している点である。単に文化財の観点だけでなく、その背景にある風土や地勢と建築の関係なども併せて分析・説明している。例えば、世界遺産候補の有力構成資産である江上天主堂(五島市奈留)について、「奈留島は『潮れ谷』という独特の地形で、海岸線の出入りが多い天然の良港であるというが、一方、谷の方には海水が入り込みやすい難点があるともいう。(中略) 天主堂は海岸より一段高くなった敷地に建てられており、敷地の周囲には溝が掘られている。」(一〇九頁) などと説明している。

### 第三章 新しい建築材料と長崎の天主堂

第三章は、建築技術と天主堂建築について、①西洋の建築の影響、②新しい建築材料―長崎では、③長崎県の初期の教会、④日本の各地の教会に分けて説明している。「①西洋の建築の影響」では、前述した通り、明治期に居留地の建築が西洋の建築技術を用いて行

れた。「②新しい建築材料―長崎では」は、煉瓦・セメント・硝子・洋釘・鋼材・ペンキ等を長崎ではどのように調達・開発したかが説明されている。「③長崎県の初期の教会」では、日本人信徒のために日本の各地に教会が建てられたのは、キリシタン禁教令が撤廃された明治六（一八七三）年以降で、日本家屋を転用したものと、新たに建築したものとに分かれることを説明している。ここでは、大浦天主堂（フランス寺、フュレ神父設計・小山秀施工）、旧大明寺教会（元々は伊王島）、出津教会、江袋天主堂、大野教会、中町天主堂、神ノ島教会、黒島教会が取り上げられている。「④日本の各地の教会」では、明治初期の教会建築が、外国人の宣教師や修道士等が、本国から本や材料等を取り寄せ、本国で見て来た天主堂を日本人の大工に伝えて建てられていることを説明している。

特筆すべき記述としては、新しい建築材料として、煉瓦は、オランダ人ハルデスの指導で、長崎製鉄所に使う煉瓦を、飽の浦の窯で焼いていたこと、セメントは、セメントモルタルやコンクリートに代わる材料として古くからアマカワ漆喰が使われており、セメントが長崎で最初に使われたのは、伊王島の洋式灯台（明治三（一八七〇）年）であったという点である。

#### 第四章 宣教師が伝えた教会建築

第四章は、鉄川興助が教会建築を行う上で、宣教師の役割は大きく、「興助と計画段階から相談し、工事の説明をし、時には工事を管理し、工事費を渡している」（二八六頁）筆者の問題関心は、「宣教師がいつ、どの段階で、建築について学習し、どの程度の技術を身に付けていたか」を説明しようとしている。いわば、宣教師は、多くの場合、教会堂の発注者となって、興助のクライアントとなっ

たと思われるため、この章が設けられている。

まず、「宣教師の履歴書」として、長崎市長や県知事に提出した履歴書から、鉄川興助が関わった、クーサン神父（一八四二―一九一三、長崎司教）、フレノー神父（一八四七―一九一三、浦上）、プチジャン神父（一八二九―八四、浦上）、ド・ロ神父（一八四〇―一九一四、大浦・出津）、ペルー神父（一八四八―一九一四、堂崎・曾根・鯛の浦）、島田喜蔵神父（一八五六―一九四八、細石流・江上）、マタラ神父（一八五六―没年不詳、紐差）、ヒウゼ神父（一八六九―没年不詳、桐古里郷・浦上）、ガルニエ神父（一八六〇―一九四一、大江）、ハルブ神父（一八六四―一九四五、黒崎）をあげている。

次に、「教会堂建設の方針」として、「平面は狭い間口と深い奥行で計画し、建築に際しては、日本の大工技術によって施工され、その建築の方針は近世から近代に受け継がれたもので、宣教師はこれらの考え方を日本人大工に伝えていたと思われる。」とまとめている（三〇六頁）。そして、最終的に、「興助の工事の実績と宣教師の関係」（三一四頁―三一五頁）、「担当宣教師と天主堂工事の工事概要」（三一六頁）の表に整理している。

#### 第五章 天主堂の請負と工事費の清算

第五章は、著者の研究の特徴がよく表れている章である。鉄川興助が建築技術者であると同時に、実業家である面は、ビジネスとしての建築業に表れており、具体的には建築の請負契約と工事費の清算方法に強く表れる。それは、事業のリスクと収益に大きな影響を及ぼすからである。本章は、請負契約、契約関係書類、天主堂工事の工事費清算の特徴が述べられている。

まず、請負契約について、施工者の決定は、入札・特命・定式請負のいずれかで決定される。輿助は「桐古天主堂改修工事以降、継続的に天主堂や司祭館の工事を請け負っており、これは特命での契約によるものと考えられる。」(三二九頁) 特命の利点は、「施主である天主堂側は、天主堂の特徴などをその都度説明する手間を省き、工事を竣工させるまでの職人や材料の手配と、工程の管理を任せることができる。」(三一九頁)

次に、契約関係書類について、明治以降、大掛かりな工事はほとんど官公庁やそれに準ずる大法人の発注で、契約書や心得書を公示して、組織の統率・工程の掌握・工事の推進を図っていた。輿助は、入札で施工者が決まる官庁工事の入札は、ルールに従って応札している一方、特命で行われていた天主堂建築工事は、順次、様々な書類を作成した。「手帳」に工事請負の経緯・工事内容、宣教師・工事関係者との打ち合わせ、工事費の受け払い等を記し、その後、「金銭受け払い簿」・「新築工事費決算書」等を整理している。また、「石材彫刻据え付け工事契約証」・「木材請負契約証」により、輿助は現場に常駐しなくても「契約証」で石材彫刻の据え付けや木材が納入される体制を整えたと言える。さらに、旧長崎大司教館の工事に信者の奉仕作業を呼びかけるのではなく、(中略) 材料の運搬請負を契約し(三二八頁)「建築材料運搬請負証書」を契約している。契約により業務内容を明確にし、管理しやすくする工夫が見られる。天主堂建築工事の工事費清算の特徴について、①材料費や職人賃などを、施主である天主堂側が関係者に支払っていること、②支払金を現金支払いではなく、「支払い伝票」での清算に変えたことがあげられる。①に関しては、輿助が費用を負担することなく、「コスト増減」のリスクを回避できたものと思われる。また、②に関し

ては、「支払い伝票」で払うことで、(中略) 材料代や職人賃を前もって用意する必要はない(三三五頁)、「現金の受け渡しによる間違いを防ぐことができる。」(三三五頁)と言ったメリットがある。そして、このような契約形態で天主堂工事を請け負ったことで、「請負金の回収に不安の少ない安全な請負で、組の成長を支えることができた。」(三三六頁)

### 第六章 棟梁の暮らし―輿助の「手帳」覚書

第六章は、輿助の「手帳」等の記録から窺える明治・大正・昭和の暮らしと、輿助の関心の広さ、「多彩な人」ぶりを描いている。内容は、衣食の暮らしの記録、医療と衛生の記録、交通と通信、大正一五(一九二六)年四月の建築学会参加が説明されている。日常生活面も、服装について「細シャツ」・外套・帽子を好んだこと、大きなカップでコーヒーを飲み、鳥のソテイをナイフとフォークで上手に食べることを宣教師に教えられたこと等が挙げられている。

### 3、本書が示唆するもの

明治一二(一八七九)年一月二三日に、長崎県上五島の小さな村に、大工の長男として生まれた鉄川輿助は、明治後期から大正・昭和という近代化の流れの中で天主堂の建築工事に携わり、フランス人宣教師等との交流を重ねる中で、建築技術者として羽ばたき、教会建築を中心として、多くの実績を残した。輿助の人生を通じた特徴は、①多方面の活躍、②先進的な学習・企画力、③経営実務能力、の三点にまとめることができる。①多方面の活躍は、建築技術者のみならず、経営者・政治家としての多面的な活動である。②先進的な学習・企画力は、建築技術や建築資材・道具等、新しい技術を、

旺盛な好奇心を持って採り入れ、自らの教会堂建築等に取り入れていったことである。そして新知識獲得は、宣教師や建築学会から学習し、そのエネルギーの大きさに驚かされる。③経営実務能力は、建築実行面と事務管理面に見られる。建築実行面は、「手記」をはじめとする記録や、工程管理、事務管理面は、各種契約書や工事費清算等に表れている。当時としては、近代的・合理的な実務であったと考えられる。そして、このような「多面的な現実的改革者」が、地元・五島や教会堂建築を愛し、最後まで、仕事のフィールドを五島・長崎・九州地区に置いたことである。現在のように交通機関が発達していない時代背景を考えると、広域に活動していると言えよう。

本書を読まれた若い方々が、鉄川輿助に学び触発され、日本を代表する建築家や政治家や学者になって行かれたら、どんなに素晴らしいことかと思う。

なお、喜田信代著「天主堂建築のパイオニア・鉄川輿助―長崎の異才なる大工棟梁の偉業」は、日貿出版社から二、八〇〇円(税別)にて販売中である。

(公益財団法人がさき地域政策研究所理事長)